4．あなた出番ですよ！第２弾

～政治分野の男女共同参画推進法を活かす～

NPO 法人 世界女性会議ネットワーク静岡
代表　守屋 秀子

１．事業目的

私どもは北京で開催された第４回国連世界女性会議・北京会議に NGO フォーラムとして参加したことをきっかけに、それ以降、真の男女共同参画社会を推進・実現するために、様々な団体と連携し活動しています。私どもは３年前に女性議員を増やす秘策を探る「あなた出番ですよ！」を開催しています。今回「政治分野における男女共同参画推進法」の施行に合わせ、「あなた出番ですよ！第２弾」を企画・開催しました。男女共同参画社会基本法が施行されたのが、平成 11 年６月。バックラッシュを経て、今、政府が女性活躍社会を掲げる中、この法律が施行されましたが、まだまだ政治分野の不平等を感じざるを得ません。女性議員を増やす策として、欧米のクオータ制や仏のパリテが日本社会に馴染むのか。参加者と意見交換、情報共有し、現状打破を目ざしていきたいと思い開催します。

２．事業内容

第１部　基調講演

テーマ「政治分野での女性の力」

講師：元参議院議員　円　より子氏

◆政治への思い
◆国会議員になるまで
◆国会議員になってから
◆「女性のための政治スクール」の誕生
◆連記制と女性議員
◆フランスのパリテ・ペア法
◆これほどやりがいのある仕事はない

第２部　み・ん・な・で・語・り・場

①「わたしの政治の捉え方」
大学生５人からのメッセージ
②「わいわいカフェ」
会場の皆さんに一言ずつ話していただく
ファシリテーター　佐藤成子（主催 NPO 理事）

３．実施日時

平成 30 年 10 月６日（土）13:30 ～ 16:00

４．実施場所

静岡県男女共同参画センター・あざれあ
５階　502 会 議 室

５．対象者

一般・大学生・協働団体会員

６．参加人数

25 名

７．事業の成果

【第１部】基調スピーチ
「政治分野での女性の力」
【講　師】円　より子　氏
（元参議院議員・女性のための政治スクール校長）

▶フリーライターから国会議員へ…

皆さん、こんにちは。円より子です。1992 年に細川家 18 代当主の細川護熙さんが日本新党という政党をつくりました。なぜ日本新党をつくったか。あの頃は、お金の癒着問題がひどく、政治不信が頂点に達していた時でした。細川さんは熊本県知事でしたが、中央集権ではなく地方主権、官僚や経済界のえらい人のための政治ではなく、庶民、生活者の主権の政治に変えよう、政治文化そのものを変えようと日本新党をつくりました。

私はフリーライターでした。離婚を考えている人たちにきちんとした情報を伝えるために本を書いたり、「にこにこ離婚講座」を開催したり。30 冊くらい本を書き、テレビにも取り上げられるようになったころ、細川さんから連絡がありました。女性の味方という事で選挙に出てほしいということでした。

1992 年の参議院選挙に出ましたが落ちたんです。翌年繰り上げ当選になって、17 年間参議院議員をしてきました。日本新党の党則や政策作りに関わりましたが、党の執行部に「クオータ」を導入しました。クオータというのは、割り当てという意味です。日本の政党でクオータ制を党則にきちんと書いたのは、日本新党が初めてです。執行部に女性が入れたというのはすごいことです。政策決定、運営をどうするか、立候補をどうするか、ありとあらゆることに女性の意見が聞かれるということだったんです。経済界、医学界、科学界、どの世界でも政策決定、経営決定できる決定者に女性がほとんどいないことは大問題です。

▶「女性のための政治スクール」の誕生

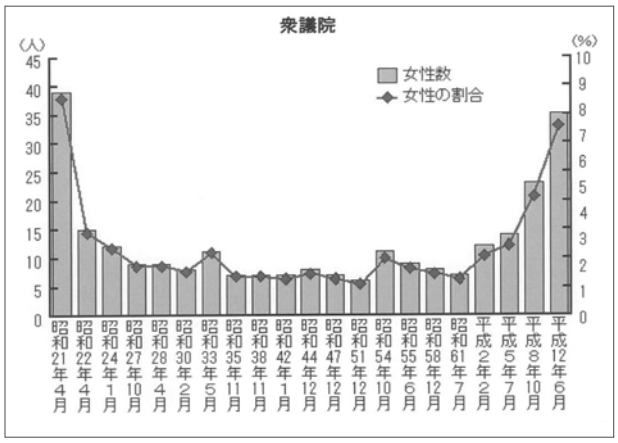
なんとか女性の候補者を増やしたい。でも誰でもいいというわけではありません。ちゃんとした教養、政策を身に着け、志もちゃんと持っている人を増やすため、「女性のための政治スクール」を 1992 年につくりました。そのスクールを今もやっています。そこからたくさんの地方自治体の議員や国会議員が誕生しました。

女性のための政治スクールの校長を最初にお願いに行ったのが加藤シズエさんという方です。1946 年第 1 回衆議院議員選挙がありましたが、その時女性が初めて参政権をもらいました。彼女はその時、娘を背負って選挙に出て当選し、28 年間国会議員をやった象徴的な存在です。その時の選挙では、女性が 39 人も当選しました。

▶連記制と女性議員

その時、なぜ 39 人も当選したのか。残念ながら、その時の 39 人から女性議員は減り続けています。今、小選挙区ですよね。長い間中選挙区だったんですが、実は 1946 年は大選挙区だったんです。すごく広い人口の多いところで選挙区があって、連記制でした。この連記制というのが女性にとってすごくいいと思いま す。ず っと女性が政治に口を出せばろくなことはない、国が亡ぶと言われ続けてきました。今だって、女性より男性という意識が強い。そうすると 2 人

区では１人目は男性が圧倒的です。でも２人目なら女性でもいいかという感じ。



３人連記制だったら、３人目はなおさら女性でいいんじゃないのとなって、39人も当選したんです。その後、すぐに中選挙区になり単記制になりましたから、女性はどんどん減っていきました。私はこの連記制を、世論が後押ししてもう一度やれば、女性議員が増えると思っています。

▶フランスのパリテ

～女性はマイノリティではない～

私はクオータを党則に入れて、なんとか政党が候補者の女性を増やしてほしいと思いましたが、クオータというの は、マイノリティの人をバージョンアップさせるためのポジティブアクションと言われるものです。割り当てから始まったマイノリティのための政策なんです。

実はフランスでは、憲法に「パリテ」というのを書いています。パリテというのは、男女だけでなく、色々なものの同数という意味です。人類の半数は女性です。有権者の半分も、県の半分を支えているのも女性です。それなのになぜ政治の世界も経済の世界も、科学の世界も女性をマイノリティにしているのか。最初から半数にしましょうというのを憲法に書いているのがフランスです。だから今、フランスのフィリップ内閣の閣僚の半数は女性です。今、安倍内閣の閣僚で女性は片山さつきさんだけです。女性活躍とは言っていますが、この女性活躍がクセモノです。女性たちが思っていた女性活躍というのは、経済的な活躍ではありません。社会的活躍として、福祉や社会的活動という意味での活躍です。すっかり意味をすり替えられてしまいました。女性活躍とか全世代型社会保障とか、そういう言葉に騙されてはいけません。女性が政治に対してだけでなく、社会に対してきちんと目を向けて、これ違うんじゃないですかって言っていかなきゃいけない。そういうひとつひとつが政治の世界にもどの世界にも女性を増やしていくことになります。

パリテをつくっても女性候補者がいないじゃないかということがあります。日本でもそういわれます。フランスでは、守らない党は政党助成金を半分にするという罰則をつけています。日本でもそういう罰則をつけるべきだと思います。

▶フランスのペア法

フランスではもう一つ、地方自治体だけですが、ペア法というのをつくりました。ペアというのは男女のペアです。立候補したいと思ったら、必ず男女でペアにならなきゃいけない。選挙民はこのペアに投票するわけです。すると、当選するのも落選するのも、必ず男女半々になります。

世界で初めて女性に参政権を与えたのはニュージーランドです。フランスはすごく遅かった。そのフランスが突然変わってきました。女性たちがやっぱり運動をして、それで変わってきたんですね。

▶これほどやりがいのある仕事はない…

女性議員を増やそう、増えるといいねと言っている人たちも、やっぱり自分が出るのはためらいます。躊躇するんですよね。政治不信が蔓延しているような状況を変えていかない限り、誰も出てくれないという状況は続くかもしれません。しかし、私は 17 年間国会議員をやりましたが、やればやっただけの成果が出てくるんです。たった 1 人でもやれないことはありません。1 人でも変えられることはたくさんあります。

2001 年 9 月 11 日アメリカで同時多発テロが起きました。その時、ブッシュ大統領がアフガニスタンを攻めるといって色々な法案が出来ました。大統領の権限で議会を通さずにいつでも報復戦争ができるという決議をした際に、全員が賛成した中で、たった 1 人反対した女性議員がいるんです。そのたった 1 人反対したのが、黒人女性のバーバラ・リーという女性議員だったんです。私達は、そのバーバラ・リーさんを、日本に呼びました。殺害予告が山のようにあり、来日するのに半年以上かかりましたが、私は彼女に、たった一人で反対するのは怖くなかったですかって聞いたんです。すると彼女はこう答えました。「私は 1 人ではありませんでした。議会ではたった 1 人です。しかし私を支持してくれた人たち、秘書やスタッフや友人、みんなが私を支持してくれました。」反対の意見もちゃんと聞くけれども、それでも信念を曲げずになんとかしようと思った時は、1 人でもそれを貫き通す。本当にすごいと思いました。

私も、そういうつもりで 17 年間国会で頑張ってきて、こんなにやりがいのある仕事はないと思いました。ぜひ、大変よというばかりではなく、こんなに面白い、やりがいがある、生まれたからにはこんなことができて本当に良かった。大変な思いもたくさんしましたけど、こんなに面白い人生はなかったと今思っていますし、これからまた後継者を育てて、来年の参議院選と次の都知事選と先を見て、毎日色々な人と活動しています。私は今 71 歳ですが、とてもいい人生を送っておりますということを申し上げて、ぜひ皆さんも政治家になってください。どうもありがとうございました。

【第 2 部】

み・ん・な・で・語・り・場

大学生 5 名に、常日頃政治というものをどのように捉えているか、これから先どう政治と関わっていこうと思っているかなど、お話していただきました。

笠井 桜 さん

私はもともとＬＧＢＴなどのマイノリティの差別問題などについて調べているうちに、日常の女性差別が存在することを知り興味をもちました。

政治に関しては、安倍内閣で女性の閣僚が片山さつきさんしかいないことについて、安倍首相が「片山さんだけで 2 人 3 人分の働きをするので問題ないです」って答えていて、そういう問

題じゃないだろうってこともあったり。私達には何ができるんだろうという意識を多くの若者が持っていると思いますし、無力感があります。若者が政治の話を日常ですることはほとんどありません。ちょっと政治の話を出すと煙たがる、敬遠する空気があります。やはり、デモとか政治的主張をするということに対してタブー感を持っている人がかなり多いと思います。
若者の投票率が低いので、高齢者向けの政策が多く、若者に無力感、政治に対するタブー感が広がり、さらに興味を失っていくという悪循環がすごくあると思います。今後、今日感じた前向きな空気を忘れずに、周りの煙たがる空気に対して一言発するだけでも、投票に促すなど何かできることがあるのではないかと思いました。

土屋 和寛 さん

僕は男性に生まれて、男性として育ってきたので、社会の中にある女性に対する男性からの差別ということに対してすごく自覚が薄いと思います。自分がほめ言葉のつもりで言ったとしても、それが差別だったり、男性だからこそ差別していることに気付かないまずさが、社会の中に多くあるんだろうと考えました。
男性優位の社会の中で、議員も圧倒的に男性が多い。国会のほとんどが男性なのに、女性のために法令をつくったり、それを進めているのが男性なのがまずおかしい。だから現実にフィードバックされていないのではと思います。やはりそこに女性議員がいないということに対してはおかしいと思います。
女性の政治参加は、単に社会の中で女性の地位向上だけでなく、政治という言葉が本来持っていたはずの意味、自分たちが声を上げることによって社会が変わっていく、政治という言葉の本来の意味を復権することにおいて、これは女性だけの問題ではなく、男性にとっても大きな意義があることだと考えました。

福原 有希 さん

どのようにすれば女性議員が増えるのか。どのようにすれば若者がもっと積極的に政治参加するようになるのか。私なりに考えてみました。
女性の声を議会に届けるためには、当事者である女性が男性に任せきりにはせず、自ら声をあげる必要があります。そのためには、まず女性の意識改革が必要です。意識改革のためには今の制度を変え、女性が議員として働きやすい環境をつくることが不可欠なのではないでしょうか。昨年、熊本市議会で赤ちゃんを連れてきた女性議員が退場になるということがありました。この報道を見て、多くの人は議会と子育ての両立は無理、女性が議員となっても活躍するのは困難と改めて思ったはずです。日本も女性が議員になっても当たり前、活躍して当たり前の世の中がきっと来るはずです。議会の環境が変われば必ず立候補者は増えると思います。
また、若者の政治参加についてですが、有権者の中で若者の人口は少なく、投票率も低いので余計に意見が通りにくくなってしまっています。私たちこそもれなく投票しなくてはいけないのです。今日のように、議員の方と直接お話